

# 水平と垂直の意味

## フランク・ロイド・ライトの落水荘にみる家の風景

生活美学研究所研究員・本学生活環境学部教授

黒田智子

私は、先ほどご紹介いただきましたように、遠藤新の建築論について研究をしています。甲子園会館、甲子園ホテルを通じて、設計者遠藤新の意図を知るために、その師、フランク・ロイド・ライトに踏み入らざるを得ないというあたりで、ライトについても少し研究させていただいています。そこで今日は近代建築の巨匠ライトによる住宅の傑作と言われる落水荘を取り上げ、ライトが欠かせないと考えていた家と自然との本質的な関係について水平・垂直の意味をテーマに考えてみたいと思います。

皆さまご存じのように、ライトはここ、甲子園ホテルを設計した遠藤新の師であったことから、本学とゆかりのある建築家です。そして落水荘についてはご存じの方も多いと思います。落水荘は1936年におおむね完成しました。おおむねというのは、その後も家具、照明器具のデザイン、増築などがなされたからです。施主のカウフマン夫妻と息子のカウフマン・ジュニアが週末を過ごしました。約四半世紀後、1964年に一般公開され、年間15万人が訪れるようになりました。そして、2019年には世界遺産に登録されたことも近年、注目を集める一因でしょう。鉄筋コンクリート造の片持ち梁・キャンティレバーにより滝の上に張り出し、滝の上に建つことから、フォーリング・ウォーター、つまり落水荘と呼ばれています。

それが一目で分かるためか、来訪者のために、このアングルからの写真を撮りやすいようにしつらえているという話も聞きます。このアングルが最も親しまれていると思います。(図1) フランク・ロイド・ライトの設計の姿勢というのは、非常に単純化して申しますと、内側から外側へということで、内面から構想し外に表す。既存の様式など外からの枠にはまらない。「屋根や壁よりも内部の生活空間が重要である。」と述べています。老子の言葉の意識で、自分と同じことを考えている人がいると、ライトはがくぜんとしたのですけれども、自分は実行する人間なので、この考えをこれまで誰も実行してなかったじゃないかと思ひ直し、立ち直ったと自ら語っています。人間的な感情は、自発性や新鮮さへの情熱と未知の存在の魅力を愛すると述べていたり、また、アメリカ社会の理想とは自由を尊重する民主主義である、そして、国民がビジョンを持たない国は滅びるとまで極論しています。同時に

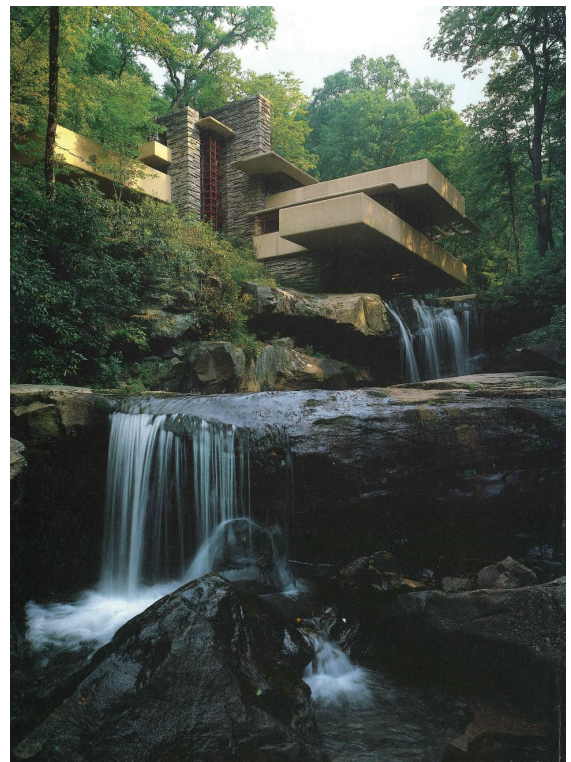


図1 落水荘 南西からの眺め  
参考文献2) 扉 p.8

ライトはヨーロッパ式にたよらない独自のアメリカ式住宅として草原住宅、プレーリー・ハウスを追求します。その到達点とされているのが落水荘ですが、その水平性、垂直性が、どんな生活像と密接しているのかというのが、今日の大きなテーマです。時間の関係で、いきなり核心部分に入っていきたいと思います。



図2 落水荘 南東の眺め  
参考文献 2) p.74, 75

落水荘を、別のアングルから見てください（図2）。このクリーム色の外壁にライトはもともと金箔を貼ろうとしていました。しかし、施主のエドガー・カウフマンは、金箔はぜいたくで山小屋にふさわしくないと却下します。もともとカウフマンはここに山小屋を持っていました。そして息子のジュニアがライトのフェローシップに学んでいました。その関係で両親とライトとの交流が始まったのです。本当に1、2年で、

この住宅が建つような流れになったということです。いずれにしても金箔案は断られて、そして現在のクリーム色に落ち着いたとされます。キャンティレバーによる躯体工事だけでなく、建具、照明、家具などにも多額の予算を費やしたので、資産家のカウフマンも金箔どころではなかったのだらうとも言われています。この判断は落水荘という名作のために良かったのではないかとの意見もみられます。近郊で採取される石材を積んだ垂直の壁と、同じ石材による床仕上げなど、きらびやかなところがなく、侘び寂びの観点から説明する方がいらっしゃるほどです。

では、金箔案はライトの気まぐれな思い付きだったのでしょうか。ライトは生涯、有機的建築を求め続けた建築家ですが、有機性というのが少なくとも全ての要素が一つにつながり合うことを前提としているはずです。そうであるならば、金箔案は落水荘の設計意図に密接していると考えられます。ライト研究で著名なドナルド・ホフマン（Donald Hoffmann）は、ライトが派手に輝く金色ではなくて、日本の屏風に使われるような抑えた金色をイメージしたと推察しています。それには理由があって、同じく世界遺産となったバーズドール邸にも似たような屏風が対に用いられています（図3）。また、ライトは自分自身のスプリング・グリーンのアトリエ兼住居にも金雲の屏風絵を掲げており、とてもライトが好んでいたことが分かります（図4）。プレーリー・ハウスはライトの初期の住宅の目指したスタイルを指すのですが、アレン邸やマーティン邸など、プレーリー・ハウスにたびたび屏風が用いられています。

ライトが用いた屏風はこのような洛中洛外図系で、



図3 バーズドール邸 居間の金雲の屏風絵  
(1921) allthatsinteresting.com



図4 ライトのアトリエ兼住宅タリアセンイーストのスタジオ東側の金雲の屏風絵  
(1911) xabierdejaureguiberry.com

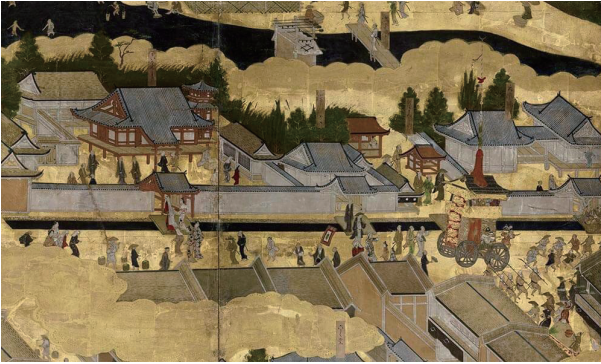


図5 洛中洛外図屏風 金箔などで雲を金色に塗る「金雲（ぎんうん）」は、技法や意味よりもむしろ華やかさの演出とされる 洛中洛外図屏風：佛敎大学図書館デジタルコレクション bukkyo-u.ac.jp

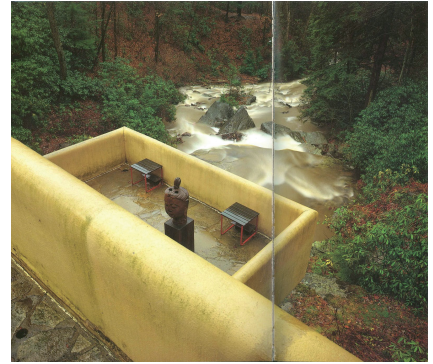


図6 落水荘 2階テラスからみた1階西側テラスと滝口へと流れる水流 参考文献2) p.142,143

エッジが丸くなった金雲です（図5）。このような金雲は、華やかさの演出とされていて、あまり意味がない技法というふうに五味文彦は捉えておられます。それに対して落水荘はどうだったのでしょうか。金雲の輪郭のように、外壁のエッジは丸くかたどられていて、これが徹底しています。そして菩薩の彫刻などを置いています（図6）。これはライトも菩薩像を置いていたので、張り合ったのだとジュニアが書いています。そして、その丸いエッジに建具を載せています。これはパッと見ると見過ごしてしまうかもしれないんですけども、このように丸い上に建具を載せているので、非常に施工業者泣かせだったのではないかと思います（図7）。有名な、居間から川に降りていく階段は、やはりエッジが丸いです。本当に工芸品のように手作りの住宅だと思います。

では、外壁の形態・仕上げと日本の屏風の金雲についてももう少し見てみたいと思います。金箔案の顛末についてドナルド・ホフマンの著書を再読してみました。金箔案についての施主の意見を、ライトは現場に常駐していた弟子のボブに尋ねるんですけども、思わしくないということでした。そこで、次は金箔とアルミニウム箔（つまり銀箔）を提案するんですけど、再度却下されます。そしてその後、白雲母仕上げというものが浮上するらしいんですけど、ひょっとしたら、シャクナゲの花をイメージした時期があったのかなと想像したんですが分かりません（図8）。ライトは、外壁は石張りにするべきだというカウフマン案を退けて、自ら送ったサンプルについて、「シャクナゲの枯れた葉」というキーワードを添えています。最終的にはカウフマン・ジュニアによれば、ライトオーカー（明るい黄土色）に決まったということになってい

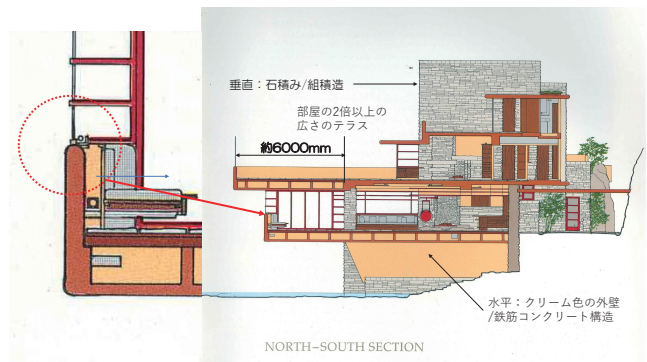


図7 落水荘の腰壁と建具のディテール 半円の断面の上に設けられた建具 参考文献2) p.97

金箔案の顛末 (By Donald Hoffmann, 1978)

1936年8月 コンクリートに箔を貼る考えは進展していないか常駐の弟子Bob Mosherに尋ねる。  
 1936年9月 ライトから金箔とアルミニウム案が提示、カウフマンは再度却下  
 1937年3月 Super Concrete Emulsions, LTDの白雲母仕上げ (mica-white finish) 案となる。  
 外壁は石張りにするべきだというカウフマン案を退け、自ら送ったサンプルについて、「シャクナゲの枯れた葉」というキーワード (the key "of the sere leaves of the rhododendron") をそえる。  
 1937年8月 色は "Cemelith" と名づけられる。最終的に注文された色は、カウフマンによれば、明るい黄土色 (light ochre)

常緑樹ではあるが、シャクナゲの枯葉案から、明るい黄土色に落ち着いたと考えられるのではないかと。



図8 シャクナゲの花と葉 および ドナルド・ホフマンによるライトの金箔案の顛末 参考文献1), 森林総合研究所九州支所/シャクナゲ (Affrc.go.jp)

ます。これが落水荘が建っている周辺なんですけれども、このように紅葉の季節には、常緑樹のシャクナゲも色付くことが分ります (図9)。

もう一度、では滝からのアングル (図1) に戻ってみたいと思います。よく言われるのは、岩が変容して建築になったような連続感です。つまり、岩がだんだんと、人工のものになっていくような連続感です。それから建築の中から滝が流れているような自然との一体感があり、ライトの有機的建築らしいと受け取りやすいのです。徐々に上へ上がっていくという感じです (図10)。

一方これはライトが自ら描いた、やはりよく知られた透視図ですけれども、先ほどのよく知られたアングルと一見同じように見えますが、違った意図が読み取れるのではないかと思うようになりました (図11)。つまり、滝が落ちる垂直性には組積造の積み上げられた壁が対応していて、そして、流れ落ちる滝口の広やかな幅が張り出したキャンティレバーの水平線に呼応していると捉えられます。そして何よりも滝の幅が広いということです。探したところこのような幅の滝の写真というのはちょっと見つかりませんでした。

さて、ライトが落水荘の最初の図面を、クライアントのカウフマンが車でピッツバーグからやってくる約2時間のうちに書き上げた、という逸話が有名です。これはそのときに書かれた平面図です。基礎は岩盤の上に、礎石と鉄筋コンクリートを組み合わせて立ち上げるのですが、その中心線を拾うと、図の赤いラインとなります。それに対して滝が流れ落ちる落ち口は、図のブルーのラインになります (図12)。そのとき一緒に書いた南立面図は、基礎のグリッドに対して先ほどの平面図で見た落ち口はブルーのAの範囲となります。

ところが、ライトは1グリッド増やして水を落として、透視図 (図11) を描いていて、それはブルーのBの幅まで

図12 落水荘の最初の平面図 (1935年9月) クライアントのカウフマンがピッツバーグからやってくる約2時間のうちに描き上げたという逸話が有名基礎は岩盤の上に組積と鉄筋コンクリートを組み合わせて立ち上がる。その中心線が赤いライン。滝が流れ落ちる落ち口は青のライン。  
参考文献3) p.8 をもとに筆者作成



図9 紅葉の季節に黄色くなったベアラン川のシャクナゲ  
参考文献2) 中表紙(裏)



図10 滝から見た落水荘の水平・垂直 岩が変容して建築になったような連続感、建築の中から滝が流れているような自然との一体感があり、ライトの有機的建築らしいといわれている。  
参考文献2) p.169 をもとに筆者作成

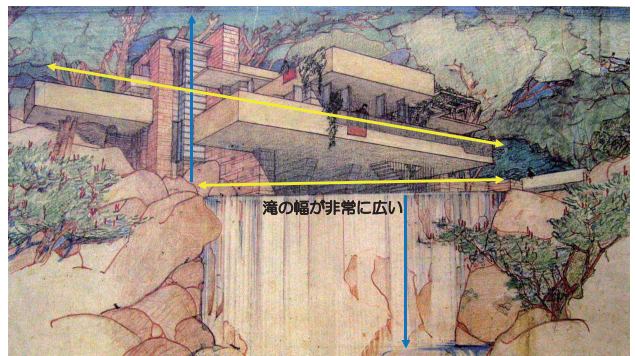
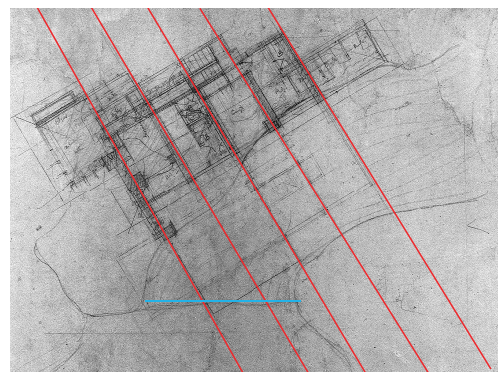


図11 落水荘透視図 ライトによる描画  
参考文献2) p.42, 43



広がります（図13）。実はもっと幅を拡げたいという意図が読み取れるように思います。これは描き間違いではないのかという考え方もあると思うのですが、ライトは図面の神様といわれていました。15年以上前に弟子の遠藤新がライトの下で修行したときに、ライトにも間違いがあるのではないかと、朝早く図面を確認したらやっぱり間違っていたというような、逸話があります。したがって1グリッドの滝幅の拡幅は意図的なのではないかと思われる。

同時に落水荘は、全体に水平性が強調されています。ライトは水平性を大地に生きる人間の自由の表現として、初期のプレーリー・ハウスから強調してきました。落水荘では滝の落ち口の文字通りの水平と呼び合って、キャンティレバーによる3層のテラスと、ひさしの水平を幾重にも重ねる、そういう意図が平面図と南立面図の比較から見えてきます。

次に、各室のテラスとひさしに金箔をちょっと乗せてみようと思います。すると、この最初に注目されるもう一つの特徴は、木々の間、落水荘上部にこのようなフリーハンドのラインがあり、カウフマンが来訪するまでの2時間あまりのライトの気分が読み取れるのではないかと思います（図14）。先ほどのエッジが丸いということもあって、流水紋として乗せてみることにしました。水が流れ落ちるバランスと合うかなと思うのですが、いかがでしょうか（図15）。これを見てまず思い出すのが落水荘設計の6年前、愛弟子の遠藤が甲子園ホテルを完成させたときに『新建築』に掲載したこの透視図です（図16）。着彩はありませんが、流水紋による雲が描かれています。チーフアシスタントとしてライトのために働いた帝国ホテルから7年、自信作の甲子園ホテルを仕上げるのですけれども、あまり記述を残していません。遠藤は筆が立つ建築家だったのに短い文章しか残していないのです。そういうところから、この生活美学研究所での甲子プロジェクトが始まりました。各界のご専門家の方にいろいろお話を聞こうということで始まりました。

その経緯と共に思い浮かぶのが、ホテルの開業と同時に印刷されたリーフレットです（図17）。

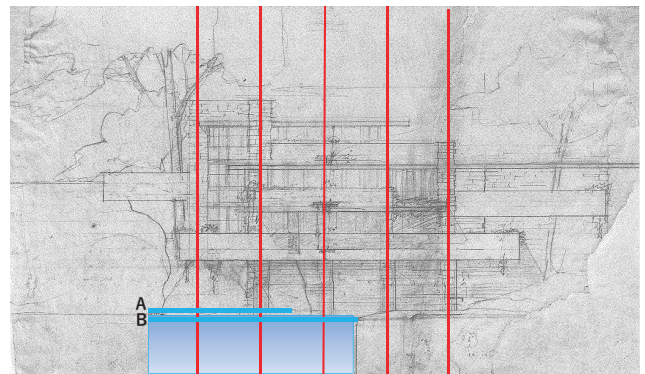


図13 落水荘の最初の南立面図（1935年9月）  
基礎のグリッドから、平面図で見た落ち口は、Aの範囲。ところがライトは、Bのようにワングリッド幅を広げて滝を描いている。  
参考文献3）p.12 をもとに筆者作成

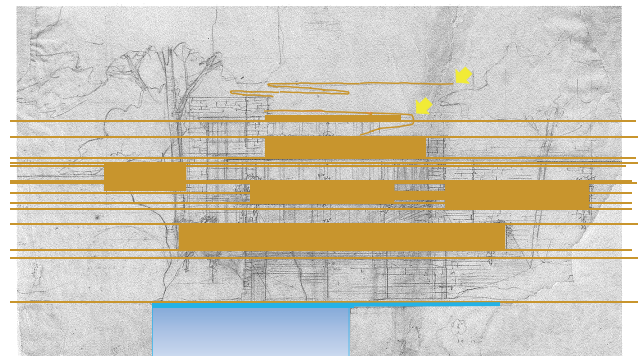


図14 落水荘の水平性 矢印のフリーハンドの線がライトの描画時の気分を表すのではないか。現在は、クリーム色に塗装された各室のテラスと庇をライトの当初の案と同様に黄金に着彩。  
参考文献3）p.12 をもとに筆者作成

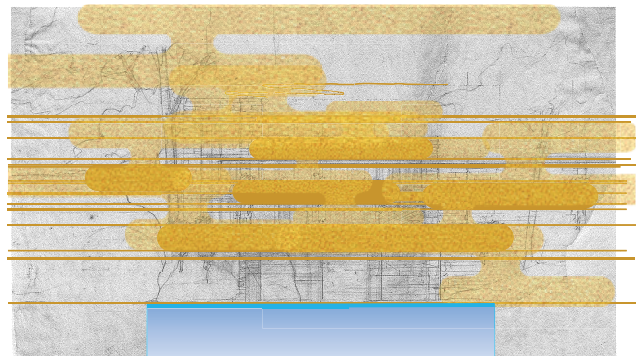


図15 落水荘の金雲のイメージ 金箔仕上のアイデア、洛中洛外図系屏風好み、図14のフリーハンド、水平性、手摺・腰壁上部の半円の断面などから得るイメージ  
参考文献3）p.12 をもとに筆者作成

大地がクリーム色と金色に彩色されています。迎賓館として国内外の賓客のために設計された甲子園ホテルですが、拡大しますとホテルのシンボルマーク、打ち出の小づち。大黒天の象徴ですね。ホテルの建築、ホテルの名称、ホテルのシンボルとしての塔に、金色の彩色が見られます。これは、甲子園会館1階のショーケースにもあるので、私も今日再確認して帰りたいと思っています。さて、このリーフレットのクリーム色と金色の用い方は、さかのぼる6年前。1924年に、ライトがエーリヒ・メンデルゾーンに語った言葉とほぼ一致していることが分かりました(図18)。

ホフマンによれば、ライトが遠藤ではなくメンデルゾーンに語った言葉として、メンデルゾーンが記している、例えば黄色は創造、大地、生命、生活、金色は思考、生命、生活、幸福なのだということです。それが、遠藤が甲子園ホテルのリーフレットに用いた意味とほぼほぼ一緒だということが確認でき、そうなってくると、こういうコンセプトの共有というのがライトと遠藤新の間にあったと考えられるのではないかと思います。また、これまでの研究から、大地に立ち上がる塔に応じて、打ち出の小づちが象徴する大黒天が恵みの雨を甲子園ホテルに降らせ、それが川に合流して周囲に及ぶという垂直の関係が考察されました(図19)。つまり、石積み、組積造の表現による塔(煙突)、そしてそれに応える恵みの雨というふうに考えると、不思議なことに、落水荘の石積みの組積造の壁は、暖炉に対しての煙突でもあるということが甲子園ホテル

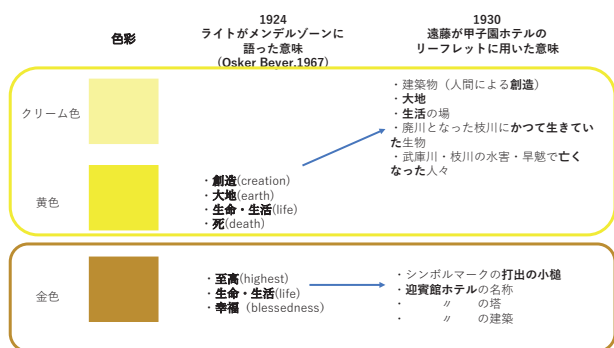


図18 ライトと遠藤がクリーム色・黄色・金色に与えた意味 黄色とクリーム色の違いがあるがほぼ一致し、ライトと遠藤のコンセプトの共有が推察される。参考文献1)と甲子園ホテルのリーフレットをもとに筆者作成

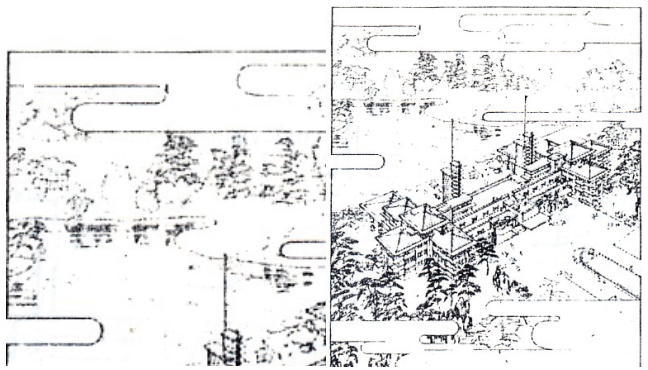


図16 遠藤新による甲子園ホテル(1930)の鳥観透視図 着色はないが、流水紋による雲を描画 新建築 1930. 6

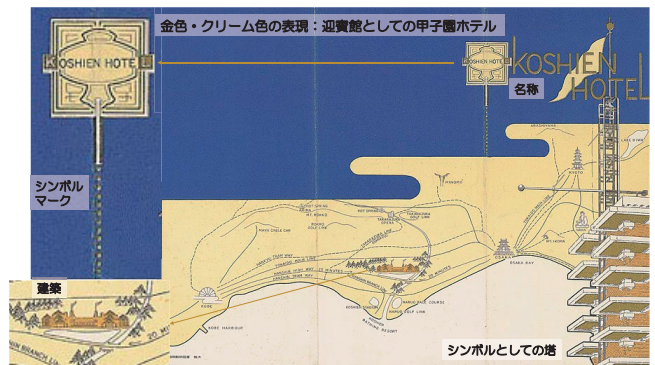


図17 甲子園ホテルの開業時リーフレット 大地をクリーム色と金色に彩色。シンボルマーク・打出の小槌(大黒天の象徴)、ホテルの建築、ホテルの名称、ホテルのシンボルとしての塔に金色の彩色がみられる。武庫川女子大学所蔵



図19 甲子園ホテル開業時リーフレットにおける塔と打ち出の小槌の意味(武庫川女子大学所蔵) 大地から立ち上がる塔(煙突)に応じて、打出の小槌が象徴する大黒天が恵みの雨を甲子園ホテルに降らせ、それが川に合流して周囲に及ぶという垂直から広域へ水平に広がるの関係が読み取れる。

とまた共通していることが指摘できます（図20）。

そうであるならば、どんなことが言えるのだろうかというのが次のお話です。左の甲子園ホテルは、大変装飾的な建築です。右側が落水荘なんですけれども、比べるとかなり単純化されていると言えます（図21）。そして、葉っぱ同士ということで、周辺の植性を見ますと、これは遠藤新が自身でちゃんと文字にしてるんですけれども、周辺の松林と同じ高さ、同じ色の緑の互屋根なのです。右側はドナルド・ホフマンが可能性として考察していたちょっと色付いたシャクナゲの枯れた葉です。ゴールデンリーフつまり金箔もリーフつまり葉という意味とすると、甲子園ホテルよりもすごく単純化していると判断できるのではないかと思います。ホフマンの考察に沿いたい気がします。では、煙突の点起、起点というか、暖炉、内部空間はどうなのでしょう。

甲子園ホテルの暖炉は、地下のバーや1階レセプション、1階支配人室、2階図書室にあります。このうち三つはぜひ見学していただけたらと思うんですけども、こうなっています（図22）。つまり火を燃やしたところに恵みの雨が迎えに来るといふ、つまり分かち合う火に対して、恵みの雨の表現がある。では、ライトの落水荘はどうかというと、1階は円、2階はちょっと三角とは言い難いですけど、水平がずれています。3階は四角の直方体ですね。赤い幾何学の立体があるということや、居間、主寝室、それから3階

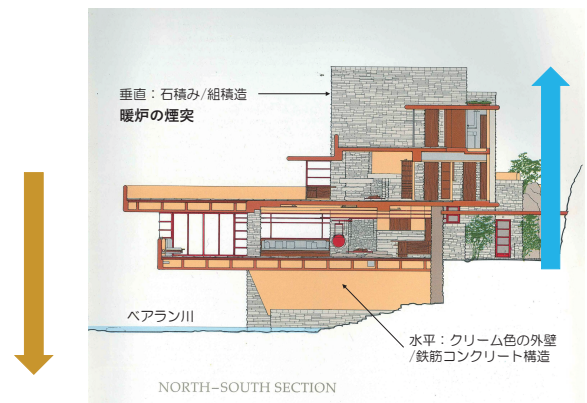


図20 落水荘断面図 石積みの煙突をもっており、図19と同様の煙突と恵みの雨の関係の推察が可能 参考文献2) p.97

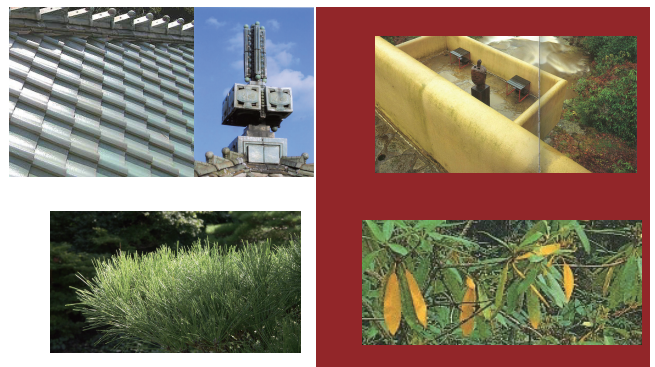


図21 甲子園ホテルの屋根と落水荘の庇・手摺の比較 甲子園ホテルの屋根は、複雑な装飾があり、周囲の松の葉と同じ緑色。落水荘の庇・手摺は装飾の付加が無く、周囲の森の秋のシャクナゲの黄葉のように色づいた茶色⇔金色のイメージだったのではないかと推察。参考文献2) p.142,143、中表紙（裏）をもとに筆者作成



A.地階のバー



B.1階のレセプション



C.1階の支配人室



D.2階の図書室

図22 甲子園ホテルの暖炉 それぞれの暖炉は、塔の中の煙突とつながっている。 筆者撮影

の書斎、こういうそれぞれの用途での分かち合いの火に、それぞれデザインがなされていて、新たな課題を示されたという感じです（図 23）。

甲子園ホテルについて遠藤は、「ライトさんこんな作品を私は独立して作りしました。」という手紙と写真を送りました（図 24）。それに対してのライトの返答は、「素晴らしい出来栄です。この作品にあなたがどんなに打ち込んだか私にはよく分かります。」といろいろほめた後、「誇張的表現にばかりとらわれすぎています。そして、帝国ホテルもある面ではその傾向がありました。」と、自らの帝国ホテルを自己批判しています。そして、「あなたには豊かな才能があります。」と続けています。こんなことあんまりライトが弟子に言っているのには、出会ったことがありません。「あなたにとって、あと必要なものは剪定。この植木の剪

定ですね。土の中にもう少し、ほんの少し、砂を混ぜることです。」やりすぎということ言葉を換えて説明していると思います。「私の手はその剪定をするための手。ただし、私自身は枝が茂りすぎていますが。」と。一般に語られるライト像から言えば、大変謙虚な言葉を残しているのです。このことをちょっと時系列で整理すると、先程紹介したメンデルゾーンへの言葉にあった黄色と金色の意味。これが甲子園ホテルのリーフレットにあり、そして、もしライトが甲子園ホテルに対して剪定が必要だということが本気だったのであれば、この落水荘はまさに自ら剪定した如く、要素が非常に少なくなったと捉えることができるでしょう。

そして、甲子園ホテル、落水荘共に垂直の煙突が恵みの雨を迎えに行く。それに応えて金雲が降りてきて恵みの雨を降らせるというようなストーリーが描けるのではないかとわかってくるわけですね。ライトは恐らく最初の図面を書いたときから滝の幅を広げていた。豊かな恵みの雨を表そうという考えがあったことが推察されます。このことは少なくとも、カウフマン・ジュニアやフェローシップの弟子たちにも語られなかったようです。ホフマンによれば、フェローシップのメンバーには、落水荘は自分一人でやるんだというふう述べていたという言葉が、弟子の証言として残っています。落水荘はライトにとって特別な案件だったと推察されます。ですので、水平のクリーム色の手摺・ひさしから降り注ぐ、さらに滝に降り注ぐ、こんなにたくさんの恵みの雨なのだということなのかなと、ライトのパーズが読み解けてくるわけですね（図 11）。そうであるならば、今日は、北斎の版画の比較をしてさらに考察したかったんですけども、これは時間の関係上、



図 23 落水荘の暖炉 1階の居間には、もともとピクニックを楽しんだ場所の石をそのまま残して暖炉を設置、赤い球体はワインクーラー。2階は、暑く大きな石をずらしながら配置、3階は近くの石切り場で偶然見つかり切り出された赤い正方形の石を配置。参考文献 2) p.87, p.140,141,p.154 をもとに筆者作成

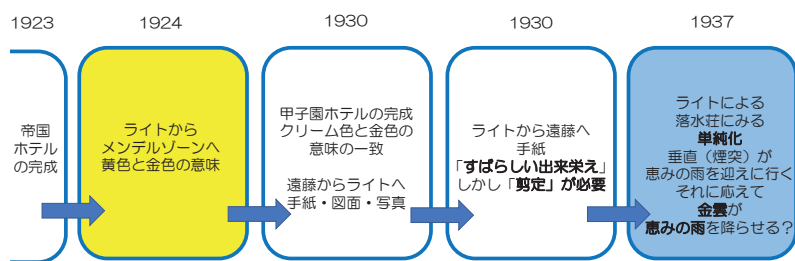


図 24 落水荘と甲子園ホテルの語られなかったコンセプト共有の可能性 参考文献 1)、5) をもとに筆者作成



又の機会に、と思います。

『TIME』に落水荘の特集が載ったときにライトが表紙になって、ライトの視点は滝口より上にあります。「このように滝を見るのもいいけど、さらに空をご覧よ。」と、人々を促すかのようなようです（図25）。私は、こういうタイピンのつけ方は、20世紀のネクタイに19世紀の配置でつけたように思われ、あんまり見たことがありませんが、このように1粒、僕にも恵みの雨がやってきたよ、みたいな、そういう意図だったのでないかと思われまます。そうすると、先ほどの謙虚なライト、そして、ウイットに富んだライトに大変親しみを感じた次第です。この落水荘の小さくて深い池（プランジプール（滝壺）と名づけられています。）のコーナーにあるハートック・リップチッツ（Jaques Lipchitz,1891-1973）の彫刻「母と子」（図26）は、ライトがここにわざわざ配置したということをカウフマン・ジュニアが書き残しています。1956年、トルネードで破壊されたのを、ライト自ら修復したということです。母は天に向かって両手を広げて、恵みの雨を迎えようとしています。甲子園ホテルのコンセプトをたどると、落水荘、フォーリング・ウォーターは、滝だけでなく、まさに天からのフォーリング・ウォーターではないかと思われるのです。

以上、ご清聴ありがとうございました。

後記：遠藤とライトのやり取りにはさらに後日談があります。遠藤が落水荘をどのように評価したかは別の機会としたいと思います。

## 参考文献

1. Donald Hoffmann, Frank Lloyd Wright's Fallingwater; the house and its history, 1978
2. Edgar Kaufmann, jr, Fallingwater;A Frank Lloyd Wright Country House, Abbeville Publishers, 1986
3. Robert McCarter, Fallingwater; Frank Lloyd Wright, Phaidon, 1994
4. Lynda Waggoner, Fallingwater, Rizzori, 2011
5. 内井昭蔵（訳）、Frank・ロイド・ライト 建築家への手紙、丸善、1986
6. 遠藤楽（訳）、ライトの住宅、彰国社、1967,
7. 谷川正巳（訳）、ライトの都市論、彰国社、1968

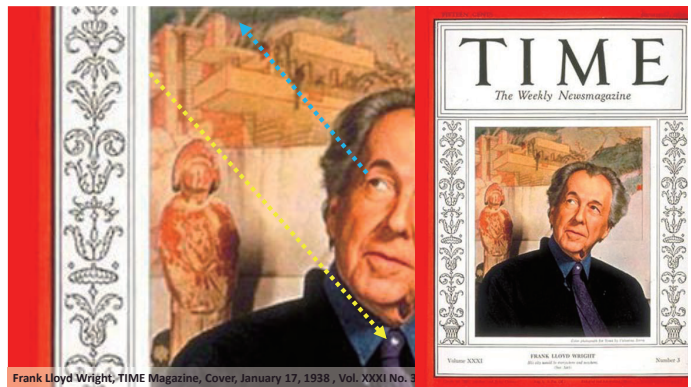


図25 『タイム』誌の表紙 ライトの目は、さらにその上、天を見ており、どうしたら、恵みの雨を沢山降らせることができるかを、雑誌を手取る人に問いかけているように見える。

Time Magazine cover, Jan. 17, 1938

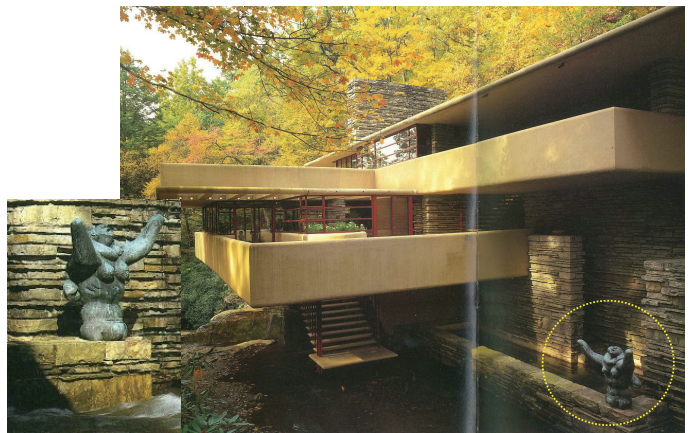


図26 プランジプールの母と子の彫刻（ジャック・リップチッツ）ライトが選んで配置。手を広げて恵みの雨を乞うているようだ。

p.64, 100, 101 をもとに筆者作成